

新たなる斗いの創出へ

二日 教授会団交決列衣

確 記

代々農業改良（中務長、岩本清明）と、これを構成するべつの構成員は、現在まで個別農業者に於ける、そ次官研究室と農工生田地区に於けるての保障のために、我々の肩すべき任務を果してきました。しかし、右に述べた我々の任務と責任について、農工部局より正式に確認を受けて申込まれた團体交渉人（幹事会）に關しては、緊急の事務が予定され、それでない限り、これに応する用意がある。

右の交渉に於いて、我々の果すべき任務についての責任が明確と分った場合は、いつでも、その責

を具体的にし得るものである。

個別農業者問題に関する

我々農業部教授会は、右に述べた任務と貫徹する立場に於いて、農校令第三期工事前期の要求（以下「保障の必要性」）を教務当局に要求してきた。現在、この我々の要求、すなはる農生諸君に対する教育研究の保障が為さよ、い全く事實に關しては、その責任の大部が明太當局理事会にあるものと考えられは、自らの為めに、仕事の無能にあらず、当局理事会に「お願いする」という消極的態度を改め、積極的に「要求」し、具体的に「保障」すること、即ち確固たる學識をとりつづけていく。

昭和四十三年十二月三日

農業部教授会
農業部幹事会

明治大学農場
部学生会

農連の半ばに就職であつた

教授会との折衝は、總じていつの如故に……

教授は、過去一貫してどうぞき、教授会の態度とその行動の總括と歸ふて右の確認事項と、僕達との明確取扱あります。そのためた。しかし、岩本農耕課（以下十名余の教授達）は、僕達の提出した確認事項をほんと読めらるといい乍ら、確執を交わす段階になると「教授会」にかゝつて五、六月ねば、「E」という以外の対応もしないが少くつた。（しかも岩農業部長は、当日の団交に關して教授会から一仕事（いた））をやうやくのことが、今まで教授会の位置づけすらなされていかなかったということだし、それに附隨したところの行動にもまた、一仕事（いた）をせば全いということを裏書きしたのである。

過去、單に半ばに於て、「一切の処理者をたゞなし」といふふうなら、スト終結の時も態度を危険化され、主張的に運動を展開した際を含めると、教務局はいついたいだれかのやうに、ストを解除したら、教務局は万能を出さん、いふふう、今んらが教授会をしてしかつた。へ正徳性を主張した節生と教務当局、理事会、教授会との内情は、當然の機運を導入し有異動により危険化した。

として前回の報告書へ曰着て言明してしまなから、それをなれなかつたということ。

さらに、再編の理由を「子供へ、教授会と教務局とが六、七、八、九、十、十一月に起因する」など日の团交に於いて、「農業会第三期工事後期分は理事会に対して要求しないことになつてゐる」と考本體的の答言をあつても、そのはいた、なんのから、二つした事実の一つ一つが教授会の存在をあいまいにしておはりでなく、は、二つと僕達と解決した所にあるのだといふことを述べた。受けければならない。始め、そして繊細な、僕達と教務局との間の断層はいつた時に起因するだろへがき、（僕達が二度は、最初の前に実施的非組織性と認識と決裂をもたらした。

うした結果、而して、意見は、ハッキリと豫算に対する初回支拂てねはなぬ。しかし、この一部分に於ては、理教部局の態度が、かたく過激して、こつではないか。農業部の学生諸君（教務の斗い）は、また新しくした。新たなる斗いを創出し再編の現象上手いた農校農業へ向けて出番しよう！